



ライトアップされたミラボー通り

(左下はサントン工房「サントン・フック」と「ミストラルの一撃」の人形)



## 南仏プロバンス 師走の風物詩

亀井 克之

地中海の浜辺で肌を焦がし、木陰のテラスに腰掛けバスティスやロゼで喉を潤す。各地で練り広げられるフェスティバルに身を委ね、山間のラベンダーの芳香に鼻腔を震わせる。南仏プロバンス地方の醍醐味を満喫できるこんな夏が過ぎると、バカンス・シーズンが終わって落ち着きを取り戻した街角に収穫された農産物が彩りを添える秋が訪れる。やがて、大通りのプラタナスの葉は落ち、ミストラルと呼ばれる強風がときおり吹き荒れて寒気をもたらすようになると、南仏プロバンス地方も師走である。

画家セザンヌが郊外のサント・ピクトワール山とともにこよなく愛した街で、かつてプロバンス地方の都であったエクス・アン・プロバンスでは、中心街にクリスマスの飾り付けが施され、ミラボー通りにイリュミネーションが灯る頃、大噴水ロトンドの交差点の近くに、この地方独特の粘土人形、サントンを陳列した露店が立ち並ぶ。

このサントン人形、実はフランス革命時に誕生した一大アイデア商品である。プロバンス地方の教会では、十七世紀頃より、クリスマスの季節にクレイシュ（キリスト降誕の情景模型）が飾られるようになった。フランス革命勃発と共に、マルセイユでも教会が閉鎖され、教会向け彫像師ジャン・ルイ・ラニエルは職を失った。市民もクリスマス心の心の拠り所であった教会のクレイシュを見ることができなくなった。そこで、ラニエルは、家庭用の小型クレイシュを考案し、安価な粘土人形を作って、家庭向けに販売し始めた。これがプロバンス地方の民衆の心をとらえ大成功を収めたのである。

サントン人形は、粘土で形を作り、窯で焼いた後、色鮮やかなテンペラ絵の具で着色して出来る。プロバンス語で「小さな聖者」を意味するサントンは、当初、ベツヘルムの馬小屋でキリストが誕生する場面に登場する人物たちの人形のみであった。ナポレオンの時代が終わり、王政復古期になると、サントン人形芸術は全盛期を迎え、農夫や羊飼いの洗濯女など、プロバンス地方で生活するさまざまな人達の人形も作られるようになった。キリスト誕生の場面に、十九世紀前半の服装をしたプロバンス地方の人々が登場するといふ伝統的な情景模型のスタイルはこうして確立された。

サントン人形発祥の地マルセイユでは、毎年十一月最終日曜日から一月六日の御公現の祝日までの期間、旧港から伸びる目抜き通りカヌビエールにサントン市が立つ。隣街で、作家マルセル・パニョルの出身地オーバーニュはサントン作りのメッカとなった。一方、サントン芸術にイノベーションをもたらしたのが、エクス・アン・プロバンスの工房サントン・フックである。一九五二年に二代目ポール・フックが作った「ミストラルの一撃」は、ミストラルの突風を受けて、飛ばされそうになった帽子に手をやり、マントが片足にからみついて身をかがめている羊飼いの人形である。これは、静的だったサントン人形の世界に動きを導入した画期的な作品として絶賛された。

今年もクリスマスの季節、南仏プロバンスの家庭では、サントン人形による思い思いの情景模型が飾られていることだろう。

(総合情報学部助教授)



最近、街では、若い人たち、特に女性が、高級ポケットカメラをおしゃれ感覚で首からさげている姿がよく見かけられるとか。若者のカメラに対する関心は、一時よりは、薄れてきたようですが、デジタルカメラが、より性能のよいものになり、その利用者はますます増加していくことでしょう。▼カメラは、長らく、ある一瞬における現実の一面面を捉える手段でした。が、今日では、映し出す対象の現実にある姿をも変えてしまう可能性を持つデジタルカメラの出現により、私たちの現実との関わり方そのものも変わってきました。▼旅先で、地名や建物の名前を書いた看板の前で、記念写真を撮っている人（私自身も含めて）をよく見かけますが、なぜ、もっと美しい景色や建物を写さずに、その記号にすぎないものを撮って満足してしまうのでしょうか。現実にある美そのものを身体で感じ、自分の心のなかに記憶の一部として刻む、そんな努力こそ、これからの時代には必要では？などと、カメラを持つ者として反省しています。

(石原敏子)

### HEADLINE

- 2 面 99年度入学願書を発売
- 4・5 面 学園祭特集
- 6 面 バリ大学IIIと交流基本協定
- 7 面 新刊紹介
- 8 面 「中村幸彦文庫」を迎えて